

第1部

基調講演

【基調講演】

地域の時代を創る ―地域発展と「ひと」の役割―

むらた ぶいちろう
村田 武一郎（奈良県立大学 教授）

〔プロフィール〕

1949年石川県生まれ。神戸大学工学部建築学科卒業。地域・都市計画のシンクタンクを経て、2000年から奈良県立大学教授。この間、1995年に大阪大学で博士号を取得。関西文化学術研究都市、国際花と緑の博覧会、大阪湾ベイエリアの開発整備、大阪湾の環境保全・創造、阪神・淡路大震災からの復興などに関する計画、近畿各地域の振興計画などに従事。奈良・もてなしの心推進県民会議会長、奈良県国土利用計画審議会会長、奈良市開発審査会会長などの公職多数。一方で、奈良のむらづくり協議会代表幹事、地域づくり支援機構理事長など、地域の人々と「共働」しながら、各地域の地域発展に尽力している。最近の著書に『地域の時代を創る―地域発展と「ひと」の役割―（編著）』、『新版 海域環境創造事典（共監編著）』『海の科学（共監編著）』などがある。



地域が抱える問題点と課題

我が国各地域の産業や生活は、広域的・全国的・国際的なシステムに組み込まれ、例えば農業では、全国流通や全国レベルの規格を前提とした生産のみが各地域に求められ、地域固有の伝統的な作物や食文化が衰退し、「身土不二」は望むべくもないものとなった。巨大化した流通システムが、末端の生産者の品物一つひとつにまで規格を定めてきた。そして田畑はコンクリートで囲まれ、川は三面張りの水路にされてしまった。

こうして、各地域の産業や生活が立ち行かなくなっており、歴史文化の継承は望み難いものとなった。地域社会の総合性は失われ、家族が崩壊し、人間関係は分断された。このような状況下において、国は「自立的に発展する地域」を創れと言っているが、どのような目標や将来像を描いて、誰がどのようにそれを実現していけば良いのであろうか。

内閣府の地方再生に関する特別世論調査の結果（2005年6月、2007年12月）によると、2005年6月時点で、住んでいる地域に「あまり元気がない」「元気がない」と答えた人の割合が約45%であった。それが、たった2年半で53%に増えている。今は、もっと割合が高くなっていると思われる。一方で「元気がある」と答えた人の割合も増えており、二極化の傾向が見られた。「今住んでいる市町村の将来に不安を感じている」という人も多い。

こうした世論調査の結果を裏付けるように、各地域では様々な問題が噴出している。地域活力の停滞・低下、地域づくり人材の不足、地域戦略の不足、地域間交流・連携の不足、従来型観光地の疲弊、新価値創造の不足、新産業の不足、中山間地域の農林業の低迷、伝統技術の衰退等々である。

そして、行政は、各地域への責任を放棄した。一例として、奈良県内の某市が挙げられる。4町村が合併したが、お金がないから何もしないという状況に陥っている。これまでの行政は、財政規模が膨らむ過程で、様々な住民サービスを行政サービスとして取り込んできたが、お金がなくなってきた、そのサービスを打ち切っている。お金がなければ、地域づくりの現場へ顔を出す、ともに汗を流す、ともに知恵を絞るということを行えば良いのだが、庁舎に閉じこもったままで、何もしていない。



今後は、予算不足やノウハウ不足で行政が対応できない領域が広がり、地域づくり・まちづくり団体が、公的サービスを提供しなければならない状況がさらに広がることとなる。

地域づくりへの経緯とエコロジカル・デベロップメント

昨年7月、国土形成計画全国計画が閣議決定されたが、ここで「新たな公」を基軸とする地域づくりを進めるという言葉が使われた。行政だけでなく多様な民間主体を地域づくりの担い手として位置づけるということである。自治会、婦人会、老人会、PTA、地域防災コミュニティといった地域団体に、もっと「公」の役割を担えということなのだが、そう簡単にはいかない。なぜかと言うと、自治会であれば旧自治省、PTAは旧文部省、防災コミュニティは国土交通省がといったように、国レベルのタテ割りを地域に持込んで、全国各地域を統治してきた状況が残るからである。このため、各地域では、地域が抱える問題・課題の全体像が認識できておらず、将来のあり方を踏まえ対応すべき課題の優先順位を決められない。地域がタテ割り分断された状況下では、地域の力を結集しようがない。

日本は、明治時代から中央集権国家になり、特に1950年代以降、中央への集中傾向が強まっていくのだが、その原因のひとつに、第二次世界大戦中の国家総動員法がある。この法律によって、情報機関の本社がすべて東京に集められた。戦後もそのまま東京に本社が残り、すべての情報を東京でコントロールするという体制ができ上がった。

この一方で、役人が国全体に関わる様々な問題を解決していくのだが、資源がない我が国が生き残るための加工貿易立国政策、食糧増産対策などを進めた。この政策は、十分に功を奏した反面、海が埋め立てられ浅海域の生物多様性が失われたばかりか、陸地でも、耕地整理を行い、また防災と水利のために河川を三面張りにした。河川は水路となり、生物が棲めない水路は汚れ、子どもたちが遊ぶことすらできない状況となった。川は、生活との関わりが薄れ、最終的にはドブにというように、マイナスの連鎖が膨らんでいった。

戦後政策は、経済的に豊かな社会を短期間に実現するという、プラス面がたくさんあったことも事実で



ある。所得が上がり、モノの値段が安くなる。これは画一化、効率化のおかげであり、必要なものがすべて手に入る社会を短期間に創り上げたことは、日本の官僚システム、行政システムの素晴らしいところである。

しかし、「経済効率を重視し、画一的な施策や制度を実施した結果、各地域の個性や特性を軽視することになり、地域づくり活動が衰退し、各地域の活力が喪失していった。そして、地域の人たちは自ら考えるということ、地域全体について考え、行動する機会を無くしていったのである。

こうした経過の後、バブル経済の崩壊とともに、人とのつながりや自然との触れ合い、安心して食べられる食材の入手など、新たな豊かさを地域に求める動きがでてきた。

1990年代に入り、独自の地域づくり活動が加速した。そして、1995年の阪神・淡路大震災もあって、1998年、第5次全国総合開発計画を「21世紀の国土のグランドデザイン」という言葉に変えて、国の新しい将来像が示されるのだが、そのサブタイトルは、「地域の自立の促進と美しい国土の創造」であった。具現化のために、「参加と連携」が要請された。

ここには、各地域の個性・特性を殺ぎ、地域活力を喪失させたことへの自戒の念が見える。また、世界に誇るほど美しかった日本の国土を、工業化・経済開発の過程で、あるいは画一化した制度のもとで潰してきたことへの反省がある。また、以前は、国・地方公共団体が何でもやってあげるから、皆さんは税金さえ払っておけば良いということで、「参加と連携」という発想などなかったのだが、「参加と連携」なしにはこのグランドデザインを実現できないとなった。それが、国土形成計画の「新たな公」という言葉につながってくるわけであるが、きちんとした役割を果たす「ひと」がいなければ、コトは簡単ではない。

こうした経緯から分かることは、エコロジカル・デベロップメントが大切だということである。地域が連綿と引継ぎで育ててきた自然資源・歴史文化資源・生活文化資源・人的資源・伝統技術などの地域資源を活かし、地域の主体性と地域資本によって、また、地域の多様な関係者の「共働」と他地域との連携によって、現世代の満足を充たしつつ将来世代へ引継ぎ得る地域を創ることがエコロジカル・デベロップメントである。

地域資源を活用した地域づくりと地域発展の構図

これからの地域を新たな発展に導くには、どのような状況を創れば良いのだろうか。どの地域でも、次世代に引き継ぎ得るような基盤が積み重なり続けることが重要であり、地域内の人々の自信や誇りが醸成

されている状況が必要である。また、他地域と活発な交流を続け、刺激し合い、融合し、新たな価値を創造し合っていくことも不可欠である。

そして、各地域においては、1) 人々が信頼関係（共生関係）を築き、豊かな人生を全うできる地域を創造すること、2) 各世代が誇りをもって住み、他地域にも貢献する地域を創造すること、3) 生きとし生けるものすべての将来世代へ引き継ぎ得る地域を創造することを目標としなければならない。

具体例を示す。奈良市の東南部、万葉集に地名が出てくる「清澄」地域では、巨大化した流通システムのもとで廃れてしまった伝統野菜を復元し、それを使った料理を提供し、多くの都市住民との交流を拡大している。また、かつて栽培されていた「ムコダマシ（婿だまし）」という名称の粟で作った饅頭を復元するといった活動に取り組んでいる。こうした活動を通じ、地域の元気と人々の誇りが着実に向上している。

明日香村に隣接する高取町は、知名度が低い町であるが、2007年から「町家の雛めぐり」というイベントを実施している。それぞれの家の蔵や押入れにしまっている雛人形を、座敷へ出し、見てもらい、町民がこぞって来訪者をもてなしている。初年度は約8千人、去年はその3倍以上の約26千人が同町を訪れた。お雛さまは、個々の家の財産であるが、みんなでそれを公開することにより、地域の資源とした。また、来訪者を座敷へ上げてもてなすことにより、隠されていた「もてなし能力」を開花させた町民も多い。

地域の宝を持ち腐れにするのではなく、地域固有の資源として情報発信すると、必ず興味をもつ人たちが来てくれ、異なる情報や価値観をもつ人々との交流が生まれる。次のステップでは、1) 資源評価が得られ、活用可能性が生まれる、2) 訪れる人との間に信頼関係が醸成される、3) 人は触発され、隠れた能力を発揮し、また、新たな発想を獲得（人的資質の開花）する。こうなれば、地域固有の資源が活かされ、新たな価値（人材・文化・サービス・商品など）が生まれ、それがまた人々を惹きつけつけることに発展していくのである。

地域づくりにおける「ひと」の役割

未利用の地域資源を活用し、地域の問題点を解決し、発展する地域、持続する地域に生まれ変わらせるための「ひと」の役割を見ていきたい。

奈良で、7年前に設立した地域課題を解決することを目的としたNPO地域創造政策研究センターは、定年退職した人たちを中心メンバーに、豊富な知識やノウハウ、人的ネットワーク、行動力、社会貢献意識を活かして、世界的に有名なニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルと地元の少年少女合唱団とのコラボレーションを実現させ、また、室生での地域づくりを行うなど、地域発展のための様々な取り組みを行っている。資源と言っては失礼なのだが、リタイアした人たちは、地域にとって極めて重要な資源であり、彼等は、室生では、地域発展へ向けて「先走りするバカ」、人と人、地域と地域、市民と行政をつなぎ、地域課題を解決する「コーディネータ」の役割を果たした。彼等の活動によって、何ごとにも興味をもって参加する住民も多く出てきた。私は、地域の将来像とそこへのステップを示す専門家の役割を担った。学生も多く参加してくれた。

各地域では、1) 問題・課題に気づき、解決に向けて「先走りするバカ」を、2) 旧来からの地域社会のリーダー、3) 何もしないことのリスクが、何かすることのリスクよりも大きいことを理解している、地域全体の利益を考える意識の高い住民、4) その地域を気にかける「よ者」（計画・自然・景観・産業開発・流通システム開発・生活文化などに関する専門的知識をもつ地域プランナーやコーディネータ）、5) 行政スタッフが支援する仕組みが必要である。ここに、6) 若い視点から地域の人々に刺激を与える「若者」も存在すれば、なおさら地域活力が醸成されていく。この6種類の「ひと」の役割がうまく組み合わせられれば、地域づくりはスムーズに進むことになる。この時、ひとり二役があっても良い。

最後に、地域づくりに携わる人には、「か・き・く・け・こ」に留意するようお願いしたい。「か：仮説を立て」「き：聞く（周りの人に）」「く：繰り返す」「け：検証する」「こ：ここからが出発点だと思う」ということで、「か：仮説を見直し」「き・く・け・こ」へと何度も考えを巡らせて欲しい。地域づくりにおける「ひと」の役割がそれぞれに発揮されて、ますます地域活力が醸成されていくことを願っている。

第4回 関西元気な地域づくり発表会

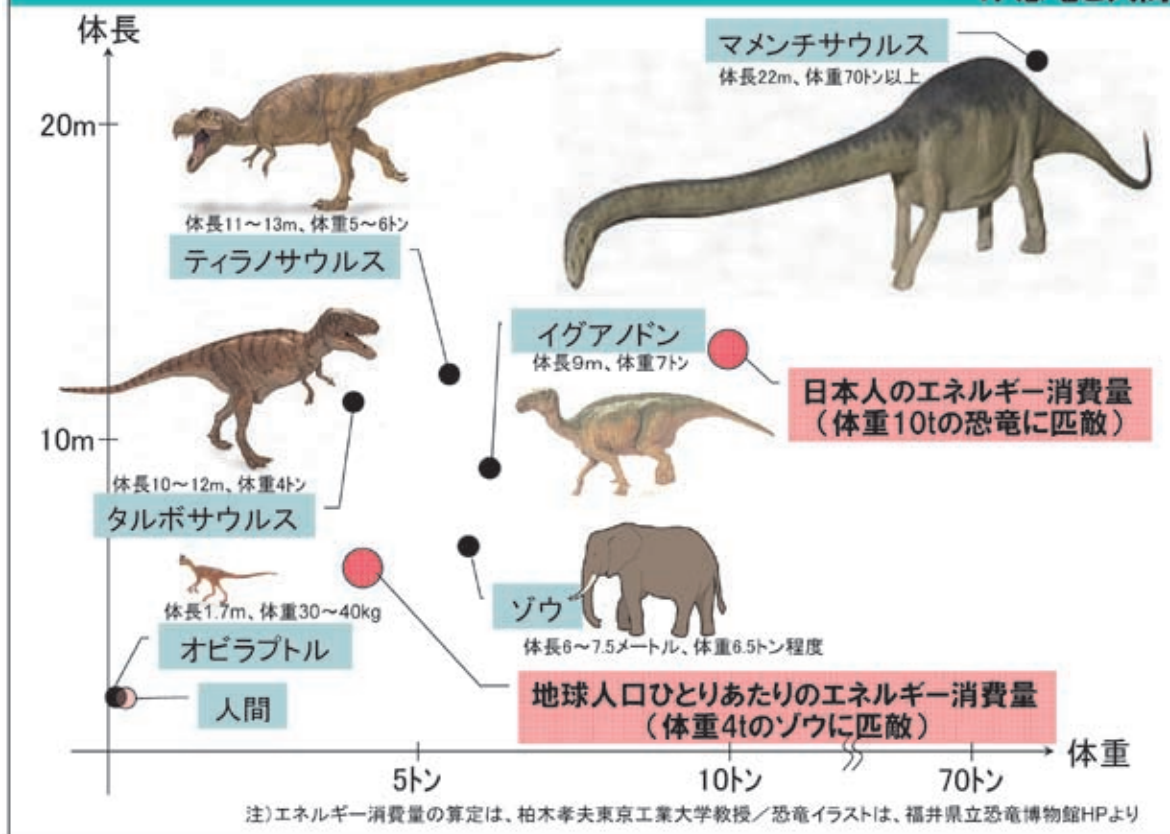
地域の時代を創る—地域発展と「ひと」の役割



1. 恐竜と人間
2. 地域が抱える問題・課題
3. 地域づくりへの経緯とEcological Development
4. 地域資源を活用した地域づくり事例
5. 地域発展の構図
6. 地域づくりにおける「ひと」の役割

2009年3月16日 奈良県立大学 村田 武一郎

1. 恐竜と人間



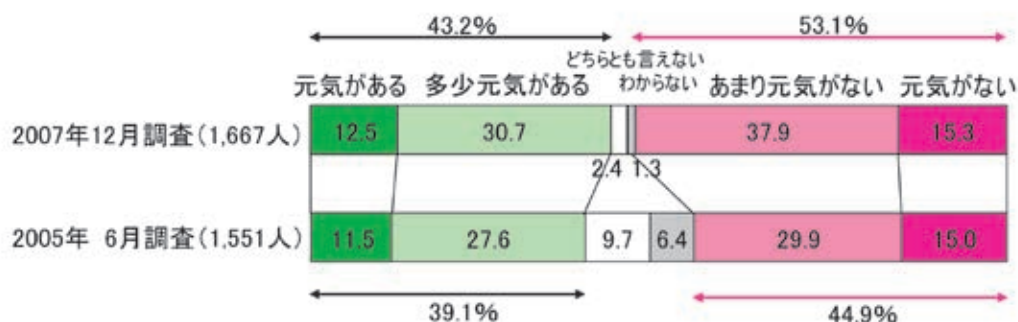
2. 地域が抱える問題・課題

我が国では、特に1950年代以降、政治・行政・経済・文化・教育・情報などの高次機能の東京圏への一極集中化に伴い、各地域の地域活力が減衰してきた。

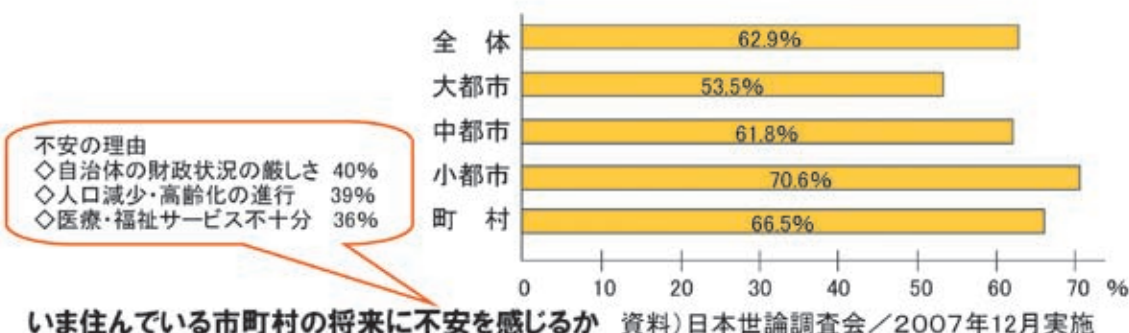
各地域の産業や生活は、広域的・全国的・国際的なシステムに組み込まれ、農業では、全国流通や全国レベルの規格を前提とした生産のみが各地域に求められ、地域固有の伝統的な作物や食文化が衰退し、「身土不二」は望むべくもないものとなった。林業では、外国産材に押され、安い素材を細々と出荷するしか生き延びる道がなくなって久しい。農山村の生活では、大都市へ労働力を供給することが当たりまえとなり、生活必需品の多くも都市で、あるいは都市を基盤とした流通・販売システムの末端で購入している。

こうして、各地域の産業や生活が立ち行かなくなっており、歴史文化の継承は望み難いものとなった。地域社会の総合性は失われ、家族が崩壊し、人間関係は分断された。このような状況下において、「自立的に発展する地域」をどのようにして創れというのであろうか。どのような目標や将来像を描いて、誰がどのようにそれを実現していけば良いのであろうか。

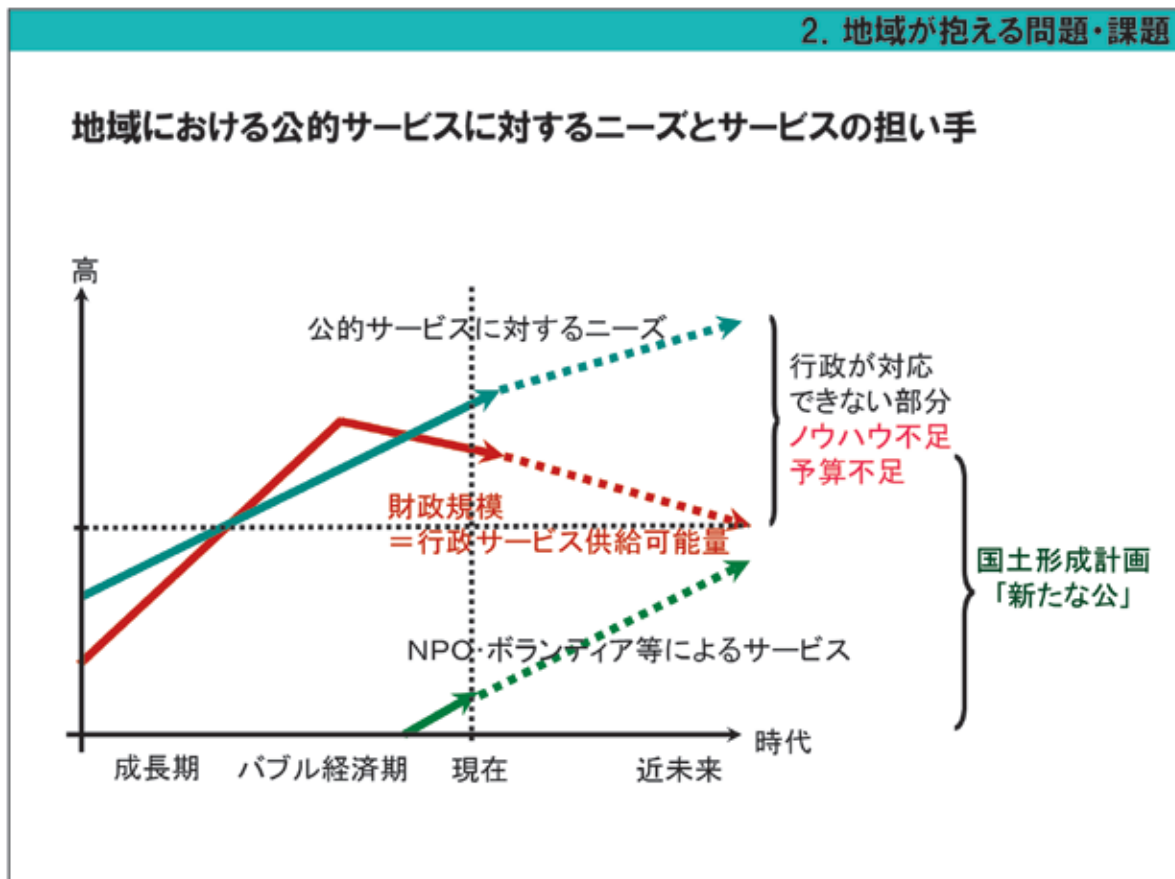
2. 地域が抱える問題・課題

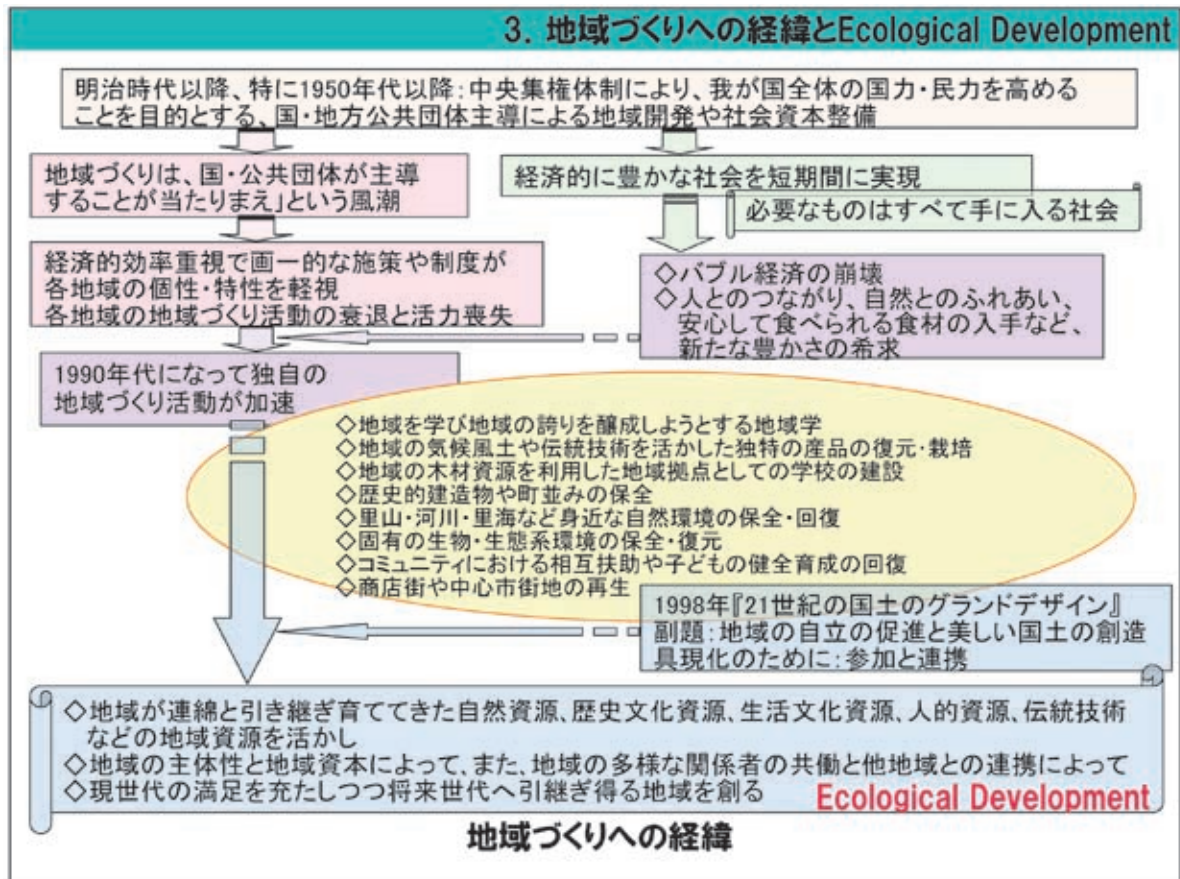


地方再生に関する特別世論調査 内閣府政府広報室2008年1月17日発表



2. 地域が抱える問題・課題		
地域の人々が主体的に取り組むべき地域課題・テーマの例		
分野	事象	地域課題・テーマ(キーワード)例
社会	高齢化 安全の喪失 女性の社会進出/少子化	生きがい、社会への再参画、社会貢献、地域ぐるみの高齢者福祉 地域ぐるみの子どもの安全確保と居場所づくり、地域防災体制 地域における幼児・児童の保護・保育、安心して子どもが生まれる社会・環境
価値観	価値観の多様化 自己中心主義	世代間のコミュニケーション、求めるものの多様化に対応する基盤整備 自己超越の機会、自由と責任の理解、地域社会におけるコミュニケーション
環境	地球環境問題 生活環境問題	ゼロエミッション、リサイクル、循環型社会 自然とのふれあい、自然環境の維持・更新、安全・安心、食育
都市	一極集中 居住空間の世代的偏り 社会基盤の老朽化	コミュニティと職場の乖離問題への対応、コミュニティデビュー 居住ゾーンにおける世代更新の仕組みづくり、コンパクトシティ 交流・学習の場づくり、公民館・商店街等の再生
地域	地域活力の停滞・低下 地域づくり人材の不足 地域戦略の不足	地域の誇りの醸成、将来像の共有、地域資源の活用による地域活力の醸成 地域プランナー・コーディネータの育成、リタイドの再教育と地域での活躍 地域資源の再発見と地域まるごと売出し作戦、マネジメント人材の導入
交流	地域間交流・連携の不足 従来型観光地の疲弊	地域発見・体験型の交流システムづくり、グリーンツーリズム 宿泊施設等の改修・更新、新たな魅力の開発と参加型観光システム、食の重視
産業	新価値創造の不足 新産業の不足 中山間地の農林業の低迷 伝統技術の衰退	生活・文化背景や保持する情報が異なる人々の交流、共働PJの実施 地域密着型ビジネス・地域に愛される企業の育成、地域資源の発掘と活用 地産地消、消費者との信頼関係づくり、大規模流通からの脱却と新業態開発 手づくり品の良さの再認識、人材の育成、工房の立地促進
行政	各地域への責任放棄 地域の将来像の不明確さ	自律と連携、NPOの育成 地域の課題の発見と解決策の提示、住民参加による地域の将来像の明確化





3. 地域づくりへの経緯とEcological Development

地域の発展とは


- ◇次世代に引き継ぎ得る基盤が積み重なり続けている。
社会経済基盤施設、自然的・社会経済的環境
社会経済の仕組み、対外交流ネットワーク、知識・情報、文化など
- ◇地域内の人々の自信や誇りが醸成されている。
(豊かさの享受、産業発展や新事業の創造など内的活力が発現)
- ◇他地域の発展に貢献している。
他地域と活発な交流を続け、刺激し合い、融合し、新たな価値を創造し合っている。


地域づくりの目標

各地域においては

- ①人々が信頼関係(共生関係)を築き、豊かな人生を全うできる地域を創造すること
- ②各世代が誇りをもって住み、他地域にも貢献する地域を創造すること
- ③生きとし生けるものすべての将来世代へ引き継ぎ得る地域を創造すること

を目標としなければならない。





なお、各地域において目標を具体化するにあたっては、上記を基本としつつ、地域の自然的・歴史的・文化的・社会的・経済的な個性や特性を重視し、それとの関係で、より具体的な目標を設定する必要がある。

4. 地域資源を活用した地域づくり事例

奈良市 高樋町&農家レストラン粟
「食と農」をテーマに、集落機能の再構築とまちの発展

- ◇大和野菜を中心に、内外の在来種100種以上の栽培・保存
- ◇遊休農地の有効活用
- ◇農家レストラン「粟」
 NPOメンバーが栽培した大和野菜の料理を提供
 料理一品ごとに丁寧な説明
 従業員、設備、景観、ヤギ(在来種)などが癒しの空間を提供



4. 地域資源を活用した地域づくり事例

高取町土佐街地区
町家のひなめぐり／都市住民との信頼関係の構築

- ◇街並みにマッチした石畳や水路、ゴミがなく美しい景観
- ◇見て楽しいホームページによる情報発信
- ◇夢創館では、無料でお茶の接待
- ◇「懐古館」「くすり資料館」「青畝文学館」などを開放
- ◇観光ボランティアガイドの存在
- ◇町家の雛めぐりでは、雛人形の説明、駄菓子やお茶による歓迎
- ◇来訪者との関わり、信頼関係を創りだした高取土佐街では、人と人との交流が情報を呼び込み、情報が交流を呼び込む「好循環」がふくらんでいる



<来訪者アンケートより>

- ◇それぞれに、その家の思い出や生活、また時代を感じました。たくさんのお雛様を見て、とても心がなごみました。
- ◇**なんでこんなに、この町の皆さんは親切なの。**
- ◇町中でのご協力に感謝、心のこもったお心づかいありがとうございます。
お茶ありがとうございました。**おもてなしキュンとききました。**
- ◇説明書を読みながらの鑑賞が楽しかった。孫娘を思い出しながら散策、距離として適当であった。
- ◇この町は道路にゴミがひとつも落ちていない。また用水路の水もきれいで、住民の皆さんの頑張りが伝わってきます。
- ◇**町の方の楽しそうで生きいきした表情がとても印象的で花を添えていました。**
- ◇お雛様も良かったです、それを受け継がれたことを尊敬します。
ありがとうございました。**次はたくさんの人と来たいです。**

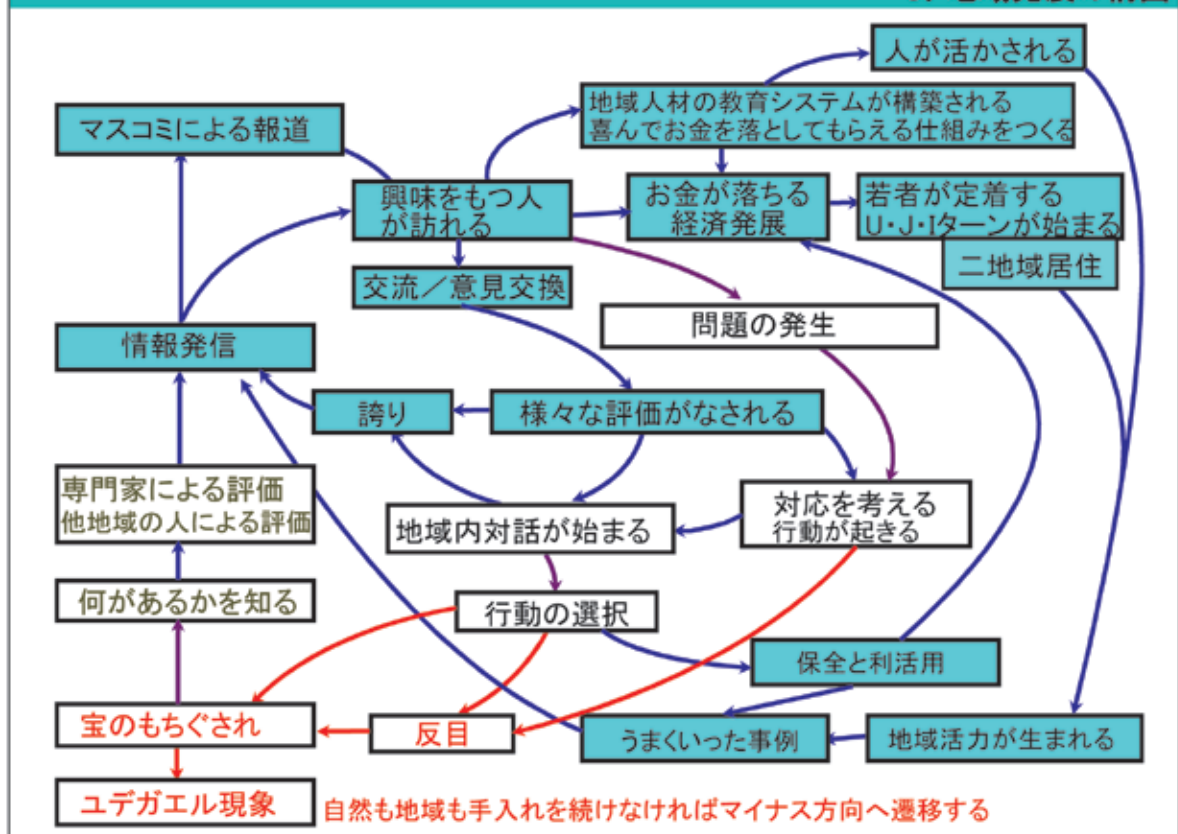
◇来訪者との関わり、信頼関係を創りだした高取土佐街では、
人と人との交流が情報を呼び込み、情報が交流を呼び込む
「好循環」がふくらんでいる

2007年3月 約 8,000人が来訪
2008年3月約26,000人が来訪

@1,500円 × 26,000人 = 39百万円

- ◇楽しかった 94.8%
- ◇去年も来た14.7%
- ◇何で知ったか「知人の紹介」38.6%

5. 地域発展の構図



5. 地域発展の構図

◇地域固有の資源が活かされ
◇新たな価値（人財・文化・サービス・商品など）が生まれ、それがまた人々を惹きつけつける

◇住む人と訪れる人の間に信頼関係が醸成される
◇人は触発され、隠れた能力を発揮し、また、新たな発想を獲得（人的資質の開花）
◇資源評価が得られ、活用可能性が生まれる

◇情報や価値観が異なる人々の交流を促進
◇固有の歴史文化をもつ各地域の交流を促進



6. 地域づくりにおける「ひと」の役割

地域創造政策研究センター
地域課題を解決するシンク・アクション・タンク

◇豊富な知識・ノウハウ
◇広範で優れた人的ネットワーク
◇行動力
◇社会貢献意識

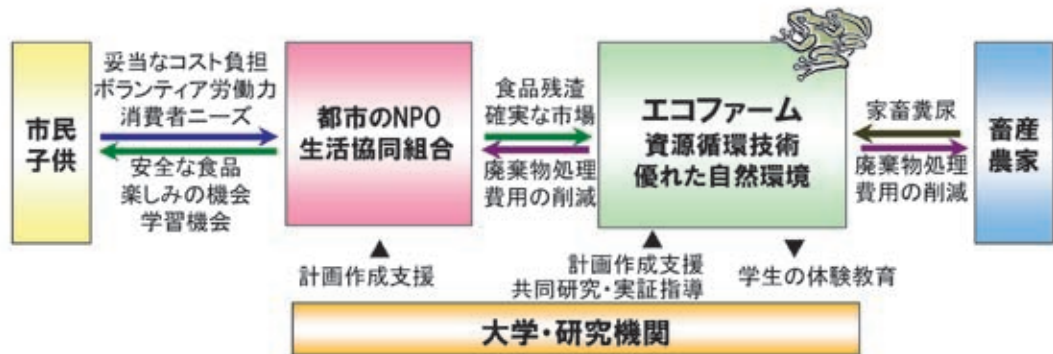
◇NYSEコンサート
◇室生エコファーム研究村づくり
◇大宇陀における農林業活性化推進構想
◇大宇陀における町家民宿の創出と参加・体験・交流型の新サービスの開発
◇政策提言 など



ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル奈良公演
まつぼっくりならまち少年少女合唱団との共演

6. 地域づくりにおける「ひと」の役割

都市と農村との連携による資源循環・環境共生システムの構想



国営総合農地開発事業大和高原北部地区

6. 地域づくりにおける「ひと」の役割

宇陀市室生区 笠間地区

- ◇山村の風景、農業資源、自然資源が残されており、それを活かす村づくり
- ◇学生の体験教育、グリーンツーリズム実験、少年少女合唱団の合宿、竹資源活用実験、世界の学生の体験学習を受入れなどすべてを、地域住民のもてなしの心によって実行(2002年から)
- ◇深野地区では、村祭りに学生を受入れ
- ◇竹資源活用実験では、指導者として招いたインドネシアの竹職人2人は、深野地区の有志の家で1ヶ月間ホームステイ
- ◇世界の学生の体験学習では、旧室生村全域でホームステイ
- ◇山菜・薬草料理を研究しているグループは、都市住民の求めに応じて料理を提供
- ◇音楽の森づくり(2005年4月から)

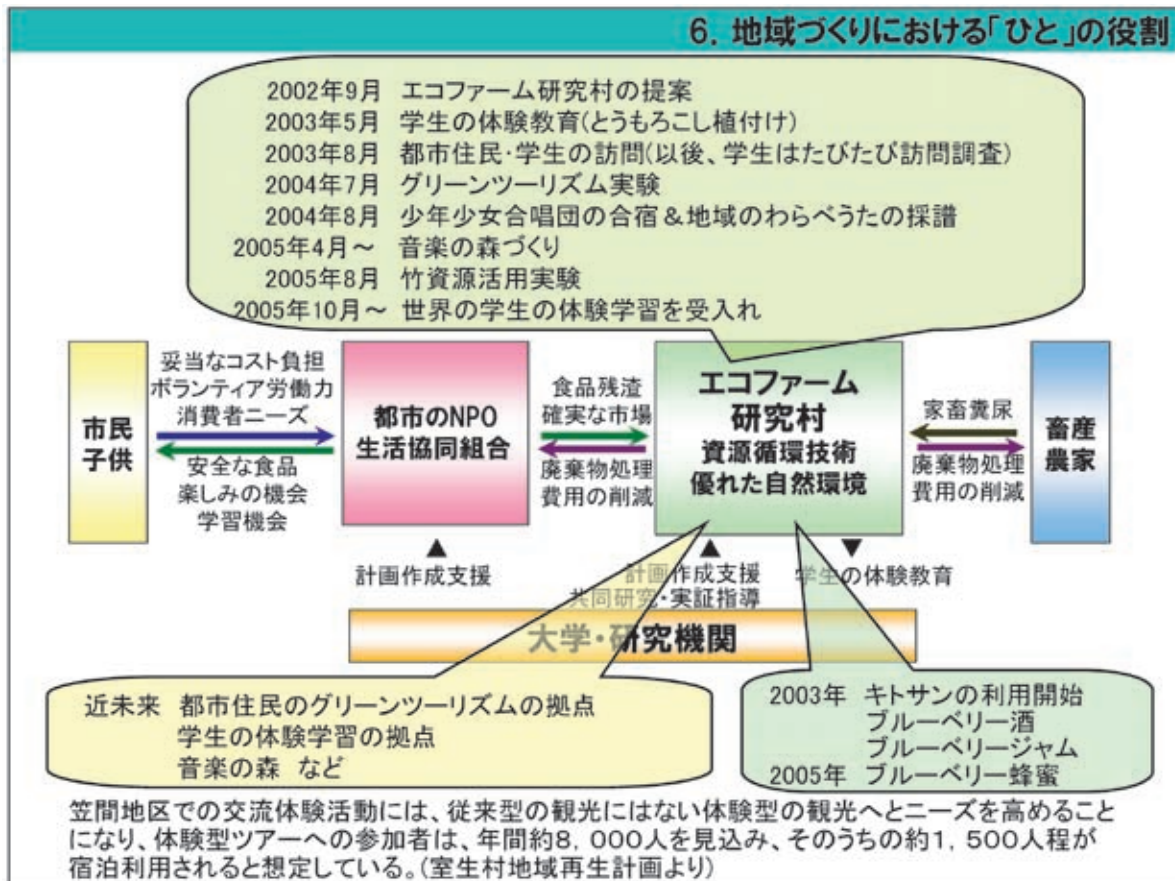


<http://nezitan.exblog.jp/2251555/>



まつぼっくり少年少女合唱団の合宿
 (2004年8月/室生村・旧笠間小学校)

6. 地域づくりにおける「ひと」の役割



6. 地域づくりにおける「ひと」の役割

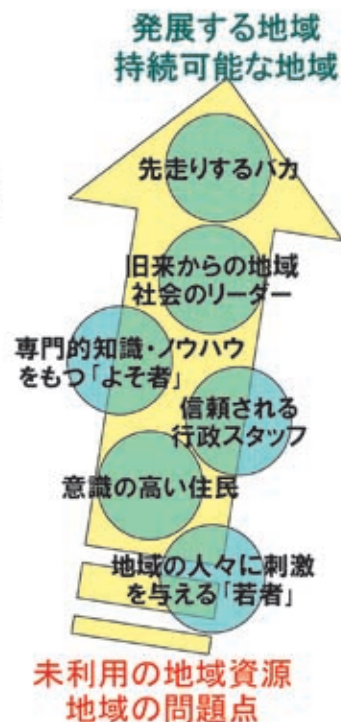
地域づくり・地域発展への人々の「共働」と地域プランナー・コーディネータの必要性

各地域では、

- ①問題・課題に気づき、解決に向けて「先走りするバカ」
- ②私心がなく、旧来からの地域社会の人々をまとめる能力をもつリーダー
- ③何ごとにも興味をもって参加する、「何もしないことのリスクが、何かすることのリスクよりも大きい」ことを理解している「地域全体の利益」を考える住民
- ④その地域を気にかける「よそ者」(計画・自然・景観・産業開発・流通システム開発・生活文化などに関する専門的知識をもつ地域プランナーやコーディネータ)
- ⑤地域において信頼される行政スタッフなどの育成が急務である。

◇地域内で新しいことに取組む「先走りするバカ」を、旧来からの地域社会のリーダー、意識の高い住民、専門的知識やノウハウをもつ「よそ者」、行政スタッフが支援する仕組みが必要である。

◇ここに、若い視点から地域の人々に刺激を与える「若者」も存在すれば、なおさら地域活力が醸成されていく。



6. 地域づくりにおける「ひと」の役割

地域プランナーと地域コーディネータ

地域計画

地域において、将来像の立案とその具体化に関する社会経済計画ならびに物的計画を提示し、その実現を支援する



地域プランナー

地域の将来に関するソフト・ハード両面にわたる計画をつくる

- ①地域の社会経済の現状、自然環境などの地域資源を調べ、地域の歴史的特性を把握
- ②問題点を整理し、問題点の解消策を模索しつつ、社会経済情勢を勘案して、将来像を検討
- ③その実現に向けての課題を抽出
- ④課題解決のための仕組み、政策・制度、基盤施設とその運営方法などを明示
- ⑤その具体化を行う

地域コーディネータ

地域の将来像の確立とその実現の過程において様々な支援・調整を行う

- ①将来像を探るために、地域の人々の思いを引き出す
- ②将来像を実現する過程において、地域の人々の関わりを調整・促進
- ③将来像を実現する過程において、地域外の専門家・関係機関を導入し、地域の人々との共働関係を構築

地域プランナーが地域コーディネータを兼任することも多い

6. 地域づくりにおける「ひと」の役割

